

令和八年三月

大学院文学研究科

野村 典彦 提出・学位申請論文（論文博士）

『民話という視座―非戦・反戦の思想と行楽・

観光のはざまに―』審査報告書

國學院大學

野村 典彦 提出・学位申請論文（論文博士）

『民話という視座―非戦・反戦の思想と行楽・観光のはざまに―』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、近代以降、アカデミズムの内外で使用され続けてきた「民話」という語の歴史を辿りながら、そこにどのような意図が込められ、どのような実践がなされてきたのかを明らかにしたものである。

本論文は、三部から成っている。

第一章「《神話・伝説》の時代の日本人の旅、そして口承文芸」では、近代化の中で変容し生成した身体が、日本人の精神に及ぼした影響について論じられている。扱われる時代は日中戦争以降であり、満洲や朝鮮、台湾など、近代日本で外地と呼ばれた地域も対象となっている。資料としては、当時の雑誌が多用されている。

第一節「一九三〇年頃、《神話・伝説》と帝国」では、時局が逼迫していく中での旅行の光景と神話・伝説との関わりについて論じられている。この時期は民俗学の胎動期であり、柳田国男も神話・伝説研究を進めていた。著者が示したのは、柳田の動向を軸とした従来の民俗学史では取り上げられてこなかった、もう一つの神話・伝説の在り方だった。

第二節「瀬戸内の風景、あるいは満洲の風景」では、日中戦争下の旅行と神話・伝説の関連について論じられている。「エロ・グロ・ナンセンス」「ロマンス」を基調としたそれらの神話・伝説は、やはり民俗学が扱ってこなかった領域である。近代においては外地と内地の旅行は連続したものだだったこと、その連続性の中に神話・伝説があったことが論述されている。

第三節「瀬戸内の風景、あるいは満洲の風景」では、鉄道と並んで前近代の日本を繋いでいたもう一つのメディアである船旅と、それに付随する神話・伝説、民謡について論じられている。本節では、女性観光ガイドの語り注目している。柳田が否定した型に囚われた言葉による語りによって、近代の神話・伝説は伝承されていた。

第四節「鮮満の名所」では、外地の観光名所をめぐる神話・伝説について論じられている。外地の名所が描写されるに際して内地の名所に見立てられる傾向があること、こうした見立てが内地の名所同士でも行なわれていたこと、反対に外地の名所が内地の名所に見立てられることにも言及され、その見立ての中に神話・伝説・民謡があつたことが指摘されている。

第五節「戦蹟の語り―案内人―」では、日露戦争直後の満洲を事例として、戦場跡での語りについて論じられている。当時の満洲では、観光客に対して軍人の武勇伝が定型化して語られていた。そうした武勇伝が戦国武将の語りに繋がるものであることが論述される。また、本節で取り上げられる話が戦後の教科書に載ることはなく、民俗学史から排除されたものであると述べられている。

第二章「民話」の思想、「民話」の受容」では、近代から戦後の高度経済成長期に至るまでの「民話」という語の語史を辿り、そこに込められてきた思想とは何か、人々にどのようなように受容されてきたのか等について論じられている。対象は文学から民俗学、民話運動と幅広いが、それは「民話」という語の使用

範囲が広範であったことを示している。

第一節「大正・昭和初期の「民話」とその思想」では、近代における「民話」という語の使用法について、トルストイ等の翻訳文学、日本古典における説話文学研究、農民文学運動等を例に論じている。加えて「民謡」という語の用例についても言及している。そうした時代の空気の中に、柳田の口承文芸研究を置き、学史の読みなおしを図っている。

第二節「民話Ⅱ昔話」観の消滅」では、終戦後の混乱期を中心に、口承文芸研究における「民話」という語の使用法について論じている。論の前提として、「民話」という語に国民文学草創の期待が寄せられていたこと、一時期、「昔話」と同義の学術用語として取り上げながら、結果的に学界での存在感を失くしていった過程について触れられている。

第三節「柳田の旅、民俗学以前」では、「旅する学者」という柳田国男のイメージの生成過程について、一九二〇年代の「豆手帖から」及び「秋風帖」の執筆時点に遡って論じている。柳田に与えられたイメージは、高度経済成長期のデ

スカバー・ジャパンの時代にも消費されていった。そこから野の学問としての民俗学に寄せられていた期待についても言及している。

第四節「瀬川拓男と松谷みよ子の『民話』」では、第二次大戦後、瀬川拓男、松谷みよ子らが牽引した民話運動の動向の中での「民話」の様相について論じている。民衆史の思想に裏打ちされた社会改革運動、かつ文芸運動だった彼女ら彼女らの活動の中に、民俗学の視野に入らない成果を見出している。

第三章「『民話のふるさと』ともうひとつの『民話』」では、通俗的な民俗学イメージの象徴となった遠野における「民話」の動態を追っている。高度経済成長以降、遠野市は民俗学を観光の基盤とする方針を取り、公的に「民話」を発信するようになった。それは一面では、世間が民俗学に期待したものであった。その可能性と限界が本章で示されている。

第一節「『忘れられた日本人』という『民話』」では、民話運動が国民文学を目指していることに言及したうえで、宮本常一の代表作『忘れられた日本人』等に見出される「民話」の思想について論じている。それは制度化された民俗学

へのアンチテーゼであった。同時に、宮本と同時代に活動して、庶民の声を拾い集めた名も無き民俗学徒やルポライターの足跡を辿っている。

第二節「《昔話・伝説》研究と「民話のふるさと」」では、遠野が「民話のふるさと」と認識されるに至った過程について論じられている。序文にある通り『遠野物語』が「現在の事実」を捉えたものだったこと、それが民話運動にも民俗学にも通ずるものだったことが指摘されている。また、「民話のふるさと」以降の遠野の語り手たちの動向についても言及されている。

第三節「詩と民話の旅、震災の「伝承」」では、第二次大戦後に民話運動と並走する形で展開していった「民謡」について論じている。特に民謡の担い手が高度経済成長下の若者だったこと、若者の旅する身体が民謡の伝承を支えていたことに言及している。今後の可能性として、東日本大震災以後の語りについても触れられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「民話」という語を切り口に、柳田国男が確立した学問の枠組みを外したとき、口承文芸研究、ひいては民俗学の方向性は可能か、可能であるならば、そこから何が見えるのかを探ることを目的としている。手法としては、柳田が著述活動をしていた頃の同時代資料を渉猟して、柳田とその流れを汲む研究者たちが目を向けなかった語りを見出し、且つそれを「民話」という視座から掬い上げ、そこに二一世紀の今日に繋がる研究の可能性を見出している。奇しくも、本論文が提出された二〇二五年は柳田の生誕一五〇年目に当たり、関連する書籍・論考が陸続と出ているが、そうした中であって、本論文はユニークな視点を有している。

研究史をふり返りつつ現状を鑑みると、「民話」という語は、アカデミズム内での使用頻度は低いが、アカデミズム外で定着するという数奇な運命を辿った。「民話」が学術用語として提唱された事実も確かにあるが、本論文で指摘

されているように、社会改革運動である民話運動が孕むイデオロギーの問題と直結するため、次第に忌避されるようになっていった。その一方で、明瞭な定義もされないまま、さまざまな立場から「民話」には意味が込められ、社会的な実践が重ねられていく。著者は重層的な「民話」の語史を辿り、複雑に絡まり合った糸を丁寧に解き解していく。その結果、浮かび上がってきたのは、柳田民俗学が描いたのとは異なる近代／現代日本像である。

本論文のテーマは、副題に掲げられた「非戦・反戦の思想と行楽・観光のはざまに」に端的に表れている。近代から現代にかけて、「民話」が体現してきた「非戦・反戦」というポリテイカルな語と「行楽・観光」というノンポリテイカルな語との間を行きつ戻りつしながら刺激的な論が紡がれている。

先ず「非戦・反戦」について述べると、これは戦後間もない頃に民話運動家たちがスローガンにしてきた語であり、その文脈で「民話」が語られていた。本論文では、遡ってトルストイの翻訳作品や農民文学運動において用いられた「民話」をその先駆と位置づけている。民話運動の背景には近代日本が関わっ

た戦争への反省があり、再軍備への危機感があった。近代を生きた日本人が対峙しなければならなかった戦争と、その結果獲得した植民地に対する視線は今日でこそ民俗学のテーマ足り得ているが、柳田民俗学には希薄であった。かつての「民話」には、色濃く戦争や植民地の影が見られる。本論文では、「民話」を対象とすることにより、戦争と向き合おうとしている。また、柳田へのアンチテーゼとして、益田勝実、宮本常一らの仕事に脚光が浴びせられている。

次に「行楽・観光」について述べると、これは鉄道や航路の整備と拡張によって生成した近代的身体によって可能になった人々の活動の一端であり、その文脈で「民話」が語られていた。背景には国民国家としての制度を整えていく日本の姿があり、植民地の問題が横たわる。また、戦後は高度経済成長期に、日本の伝統文化に対する関心が高まり、そこで「民話」に注目が集まり、遠野が「民話のふるさと」として喧伝されるに至った。著者の前著『鉄道と旅する身体の近代 民謡・伝説からディスカバー・ジャパンへ』（二〇一一年）で正面から取り上げられていた問題を更に深く掘り下げた形である。今日でも地域の

風土・歴史と結び付く伝説は容易に観光資源になるが、これもまた、柳田民俗学が等閑に付していた領域だった。

以上のように新見に富み、刺激的な議論を喚起する本論文だが、考えられ得る批判を次に三点指摘する。一点目は、柳田民俗学ありきの規範批評に陥っているとの指摘が挙げられる。柳田をネガともポジともしない方向での論の展開を模索すべきであろう。二点目は、用語の不安定さである。例えば、時代ごとの「民話」の用例が詳細に挙げられる一方で、著者自身による「民話」の定義は最後まで出されない。また、《神話・伝説》、《民謡・伝説》、《伝説・昔話》《民謡・民話》等、二重山括弧と中黒でカテゴライズされる語彙の意味も最後まで説明されない。三点目は、口承文芸研究史の枠組みを問い直すのを目的としながら、専ら説話研究史にのみ偏り、歌謡研究史への言及がほぼないことである。また、欠点とまでは言えないが、完全にライブラリーワークとデスクワークに終始し、フィールドワーク資料がないのも物足りない。著者の他の論考に見られるような口承資料の引用は欲しかった。

以上に挙げたような課題はあるものの、本論文は口承文芸研究の枠組みを根本から問い直すもので、民俗学とは何かについて考えさせられる幅と奥の深さを持っている。同時に、近代日本の文化史研究であり、優れたメディア論でもある。よって本論文の提出者である野村典彦は、博士（文学）の学位が授与される資格があるものと認められる。

令和八年三月十日

主査 國學院大學 教授

伊藤 龍平 ①

副査 國學院大學 教授

飯倉 義之 ①

副査 国立歴史民俗博物館 准教授

川村 清志 ①